

アルケイアー記録・情報・歴史―
第一三号 二〇一八年二月 八一―二〇〇頁
南山アーカイブズ

戦後教育改革期における

旧制から新制への転換と学校間接続

―南山学園の事例研究―

中尾 浩康

東京家政大学家政学部児童教育学科

永井 英治

南山大学国際教養学部国際教養学科

The Converting and Articulation between Schools in Postwar Education Reform Period: A Case Study of Nanzan School Corporation

* Department of Child Education, Faculty of Home Economics, Tokyo Kasei University

** Department of Global Liberal Studies, Faculty of Global Liberal Studies, Nanzan University

NAKAO Hiroyasu* and NAGAI Eiji**

Archeia: Documents, Information and History
No.13 November, 2018 pp.81-100
Nanzan Archives

はじめに

一 名古屋外国語専門学校から南山大学への転換

1 南山大学の設置

2 南山大学設置認可申請書の不備

3 南山大学における一般教育の重視

二 旧制南山中学校から新制南山高等学校・中学校（男子部）への転換

1 転換の過程復元

2 転換の特徴

むすびにかえて

戦後教育改革期における旧制から新制への転換と学校間接続

―南山学園の事例研究―

中尾浩康・永井英治

はじめに

戦後教育改革は、一九四七年に新制中学校、一九四八年に新制高等学校、一九四九年に新制大学を発足させるといふ基本方針の下に進められた。そのため、とくに中等教育段階^①では、この基本方針に基づいて旧制中等教育機関が新制中学校（三年制）・新制高等学校（三年制）に転換した場合、設置初年度の一年生が卒業してから上級学校が設置されるのではなく、初年度のうち全学年が揃う事例が少なからずあった。この場合、初年度の二年生・三年生は編入学という形を取るのであるが、学校によっては、あえて旧制の学校に在籍し続けるという選択肢を残す場合もあり、転換と学校間接続は多様であった。

以上のことを、たとえば『学制百年史』^②や個別学校沿革史から知識として理解する人もいれば、自分自身がそれを経験しているという場合もある。それを知っている人がいる場合、個別学校沿革史やそれに類する書籍でも、自

分（著者／筆者）が知っていることは皆も知っているとあえて書かないことが多い。本稿が対象とする南山学園^③の場合にもそうした事柄があった。しかし、それでは知っている人がいなくなった時、知識は失われてしまい、残された史料を利用して一から復元しなければならなくなる。

本稿の課題は、右にみたように知っている人が少なくなっていく状況において、戦後初期の南山学園における旧制から新制への転換と進学・編入学などの学校間接続の実相を復元することが目的である。そして、選択肢が与えられたとき、多くの生徒はいずれを選ぶのかを考察し、当事者にとって旧制から新制への転換がどのように受け止められたか考える手がかりを得たい。

具体的には、まず旧制の名古屋外国語専門学校を前身校として新制大学である南山大学が設置されたとき、南山大学に二年次編入を用意しながら、大学設置認可書がそれを認めなかったため、応急措置として設置された「別科」学生の問題を扱う。ここでは、それが応急措置であったことを確認し、二年次編入となった理由について考えたい。次に、旧制南山中学校から新制南山中学校・新制南山高等学校への転換について、一次史料の分析により、どのような過程をたどったのかを復元する。その結果に基づき、南山学園における中等教育機関の転換において選択肢が設定されたところ多数派は何を選んだか、そのことが何を意味するのか考察を加えたい。また、史料分析においては、史料の作成過程の理解が決定的に意味をもったことを述べ、学校アーカイブズにおける史料調査・分析の重要性をあらためて指摘する。以上によって、旧制から新制への転換と学校間接続が多様であることについて、個別学校沿革史から事例を積み重ねることの重要性をあらためて確認したい。^④なお、本稿の執筆分担は、「二旧制南山中学校から新制南山高等学校・中学校（男子部）への転換」が中尾、残りの部分が永井であるが、全体については両名で調整した。^⑤

一 名古屋外国語専門学校から南山大学への転換

1 南山大学の設置

南山大学は一九四九年に名古屋外国語専門学校を母体として設置された。名古屋外国語専門学校とは、一九四六年に設置された南山外国語専門学校が名称変更された旧制の専門学校で、近々に行なわれる学制改革を見越して設置された学校である。したがって、名古屋外国語専門学校が新制大学に転換されるのは、予定された改革であった。⁶⁾

南山大学の設置に関してやや疑問に思われるのは、上智大学のように一九四八年に新制大学設置としなかったことである。文部省は学校教育法に基づく新制中学校、新制高等学校、新制大学を一九四七年度から一年毎に開設させようとし、新制大学制度が一九四九年度から始まることに連合国軍最高司令官総司令部(GHQ/SCAP)の教育担当である民間教育情報局(CIE)が異を唱え、その結果、十二の公・私立大学が一九四八年度に発足したことは新制大学にとつてあまり好ましいことではなかった。⁷⁾ 上智大学と同じカトリック大学を設置しようとしていた南山学園に情報は伝わっていたものと思われるが、南山学園は一九四八年設置を選択しなかった。十二の大学はすべて旧制大学が大学としては圧倒的に狭いという問題である。南山学園は一九四八年に名古屋外国語専門学校校舎を東西に拡充する工事がようやくできたのであり、一九四八年設置を選択した場合に校舎を前もって建設しておくことはほぼ不可能であったと考えられる。とくに、南山大学設置後も名古屋外国語専門学校は在校生が卒業するまで並存していたのであり、校舎建設を予定として大学設置を認可されたとしても、実際に校舎が建つまで二つの学校の学生・生

徒を收容することはできなかつたと思われる。つまり、一九四八年の新制大学設置という選択肢を選ぶ余地は、南山学園にはなかつたと考えられるのである。

2 南山大学設置認可申請書の不備

南山大学の設置認可申請書の作成は、名古屋外国語専門学校教授の中山英司が専従で当たった。開学当初の南山大学は一部（昼間部）だけでなく二部（夜間部）も設置していた。ただし、設置認可された学科と異なり、実際に二部で学生が募集されたのは英文学科のみであった。設置認可申請書は、一部についてのものが七月三十一日、二部についてのものが七月三十日付で提出された。文部省との間では、その後も書類の追加提出などのやり取りがあり、設置認可は一九四九年二月二十一日で出された。問題はその中の「開設学年 一学年」という記載にあった。

設置認可申請書を読み進めていくと、「学部及び学科別学生收容定員」の項目に「註：毎年第一学年のみ募集現存専門学校生徒の転換処置の場合に限り、第二学年に編入収用をなす（但し定員制に拠らない）」という記述があり、専門学校生が大学に編入する場合、第二学年に編入させる予定であったことがわかる。この記述は、認可申請書冒頭の「南山大学設置要項」には見られず、うっかりすると見逃すことが危惧される。その危惧が現実となつてしまい、南山大学は第一学年のみを以て始まるものとされたのである。設置認可申請書の註記による限り、編入は名古屋外国語専門学校に限定されない。そして、事実、三重県四日市の海星学園と名古屋の金城女子専門学校から編入希望者があり、南山学園はその希望者らを受け入れる予定でいた。海星学園は一九四九年九月に南山学園への合併移管を求め、十二月八日に合併調印し、一九五〇年度より南山大学附属南山第二高等学校となった学校である。¹⁰一九四九年四月以前の段階では南山学園との直接の関係はなかつたが、海星学園は一九四七年四月から校長に

四日市カトリック教会の主任であるエドムンド・ライアンを迎えており、カトリックでのつながりがあった。金城学院はプロテスタントであり、南山学園との直接の関係はないが、戦後初期には南山学園主催の音楽会のために金城学院の講堂を借りるなど、ミッション系の学校としての関係を持っていた。

以後の顛末は『南山大学五十年史』^[1]に簡潔にまとめられているので、要点のみを記せば、

①南山大学は第二学年への編入を認めるよう文部省に働きかける一方、編入希望者を「別科」に収容して大学レベルの授業を行なう。

②文部省からは別科を有する大学はその概要を報告するよう求められ、南山大学の「別科」は特殊な事情で設置されていることを説明する。

③新学年を迎えるまでに編入の認可を得て、遑って第二学年から編入していたとして第三学年に編入させることの認可を再三求め、ようやく認可を得た。

ということになる。なお、この過程で南山学園は、前述の「現存専門学校」を名古屋外国語専門学校に限定していたが、一方で海星学園と金城学院からの編入希望者を別科に収容しており、細かな点で矛盾をおかしていた。こうしたことも、編入の認可が遅れたことの要因となったのかもしれない。

3 南山大学における一般教育の重視

こうして文部省への再三の働きかけを経て「別科生」は南山大学第一期卒業生となり、一九五二年三月、南山大学を卒業した。この編入の特徴は、外国語専門学校の卒業生と第二学年修了者とを同等に扱ったことにある。学年齢をみれば、旧制専門学校卒業生は、新制では大学二年修了となり、大学三年への編入が適当ということになる。

しかし、南山大学の開設にあたって第三学年への編入は想定されてなかった。これは、編入生のメインとなる名古屋外国語専門学校の一九四九年三月卒業生は、設置認可の関係で一九四六年九月の入学であるため、合計三年に満たないことを考慮したのかもしれない。あるいは第三学年編入となると、教養課程をすべて修了したことになり、大学での一般教育科目を受講しないで卒業することに抵抗があった可能性も否定できない。

この点で、南山大学初代学長となるアロイス・パツヘが新制大学の根幹ともいべき一般教育科目（教養科目）を重視していたことが、参照されてよいであろう。¹⁵ また、上原専祿が米国外務省の一般教育への理解を評価したように、一般教育の重視はアメリカの大学の特徴として理解され、パツヘはそれを進んで取り入れていた。

米軍は世界に駐留する米兵に高等教育の機会を与える制度を持ち、駐留地の大学と契約を結んで、若い米兵の除隊後に大学卒の資格を与えられるようにしており、日本では上智大学と南山大学がその契約を結んでいた。¹⁶ これは、社会的には占領国の軍人の教育を請け負うという必ずしもプラスとは限らないイメージを持ったが、アメリカの大学に相応する教育の質が要求されたことから、高等教育の質を高く維持しなければならないという課題を担った。このような関係を南山大学は米国と結んだのであるから、南山大学は米国が求める高等教育の水準を維持しなければならない。大学教育の水準に関する意識が浸透し、且つ、求められる水準が保証されればそれは、南山大学の教育が認められたことになる。これは、パツヘにとって理に適っていたことであろう。大学教育の水準保証に関する理解が一般教育に適用されれば、人文社会系の総合大学を指向する南山大学において、自然科学の授業に必要な設備を配置したことや人文系の教養として音楽の授業を重視したことがよく理解できる。

このようにみえてくると、学年齢の重複よりも南山大学で行なわれる一般教育課程の授業を受講しないことの方が重く捉えられたことになり、旧制での教育の一年間の差異は問題にならなかったと言える。

もつとも重要な点は、別科生を経験した南山大学第一期卒業生が、わずか一名であったことにある。これは、多くの生徒が名古屋外国語専門学校を卒業する途を選んだことを意味する。ここに旧制と新制が選択肢として与えられたとき、必ずしも新制を選ぶ者が多数派とはならないという、個別事例における転換期の実相が読み取れる。その理由については、状況からの推測となるが、資格からみたとき、名古屋外国語専門学校が中等教員無試験検定を認められていたことがヒントとなる。すなわち、新制大学で新制中等教育機関の教員免許を取得しなくても、名古屋外国語専門学校を卒業すれば、旧制ではあるが中等学校教員の免許が取得できたのである。これはあくまでも教員を志望する者の視点となるが、これを高等教育修了という学歴の問題に一般化することができれば、新制大学への編入学は単純に在学期間の延長をもたらすというマイナス面（？）が強調されることになる。未だ「戦後」であることが強く意識されたであろうこの時期、経済的に負担が増えることはやはり避けられたのではなからうか。同程度の資格／学歴が得られれば、負担の小さい方を選ぶのではないか、というわけである。では、新制大学に進学する前の段階では、どのような転換と学校間接続が見られたのであろうか。

二 旧制南山中学校から新制南山高等学校・中学校（男子部）への転換

1 転換の過程復元

南山学園では文部省の予定通りに旧制から新制への切り替えが進んだ。すなわち、一九四七年度から新制南山中学校が発足し、同時に旧制南山中学校の入学生募集を停止した。そして一九四八年度から新制南山高等学校を発足させた。翌年の大学設置は先に見たとおりである。問題は中等教育段階における転換の具体相だが、これを現存す

る史料（特に学籍簿）から復元することが、ここでの大きな課題となる。

はじめに学籍簿の構造を分析した。基本となるのは、旧制中学校と新制中学校、旧制中学校と新制高等学校との転換の過程であり、次に新制中学校と新制高等学校との接続である。後者については、新制中学校の全学年が順次揃い、その完成年度を迎えてから新制高等学校が開設されれば何も問題はない。しかし、新制中学校が初年度に完成してしまい、新制高等学校が新制中学校開設の翌年度に設置される文部省の計画通りに進む形となった南山学園の場合、接続の仕方がどのような実態であったのかを確認する必要がある。

アジア・太平洋戦争を経ながらも、幸い学籍簿は旧制中学校第一期のものから残っており、保管状態も悪くはなかった。ただ、なかには劣化が目立つもの、字の解読が難しいものなどもあり、分析は必ずしも容易ではなかった。特に一九四三〜四五年の記載については、明らかに空欄が目立つなど、戦争に伴う変化や影響がみてとれた。

そして分析の結果、新制南山中学校第四回卒業生が新制南山高等学校第六回卒業生に繋がることを確認することができた。これにより、旧制南山中学校入学から旧制南山中学校卒業、新制南山中学校、新制南山高等学校卒業の過程を復元する基準線が得られた。さらに、一九四四年度に限り戦時特別措置で四年卒業があり、これを独立した第九回卒業生としていたことが明らかとなった。これによって旧制南山中学校初年度入学から学制改革期を経たこれまでの（新制が加わると転換の措置が入る）学年進行を矛盾なく復元することができた。

これらの理解でもっとも重要な点は、旧制南山中学校、新制南山中学校、新制南山高等学校では、学籍簿の卒業後の管理を入学年ではなく卒業年を指標に行なっていたことである。これは筆者らが検討した学籍簿の現在の姿であり、在学中はまだ学籍簿は完成途上であって卒業時に原則としてすべての記載が終わる。これを卒業年ごとの簿冊に仕立てることで学籍簿の「作成」が終わる。これは現用文書が簿冊のスタイルに仕立てられて保管されるとい

う、文書のライフサイクルを示していると言えよう。この点が明らかにならなかったら、すべての作業が途上で停止したままであっただろう。南山大学でもそうであるが、多くの大学が入学時に学生に与えた学生番号で学籍簿を管理するのは、まったく異なる方法が取られていたのである。おそらく、さまざまな理由によって留年する学生が少なくない大学では、全員の学籍簿を一律の指標で管理しようとしたら、やはり入学時を指標とする方が有効と思われる。これに対して、中学校・高等学校はおそらく留年が少ないため入学者≠卒業者となり、ライフサイクルのままに簿冊を作成して管理しても問題がなかったのだと考えられる。

以上の作業により、学年進行表の基礎ができた。あとは、南山学園固有の要素を付加していけばよい。一九四八年度に新制南山高等学校が設置されたとき、前年度に旧制南山中学校の四年生・五年生であった生徒がそれぞれ新制南山高等学校の二年生・三年生に編入する一方で、旧制南山中学校でそのまま進級し一九四八年度に卒業した生徒がいたことが明らかに became したので、この要素を盛り込むことにした。

こうして完成したのが表である。この表では、一例として、新制南山高等学校の第二回卒業生となる一九四四年度の旧制南山中学校入学生に網掛けをした。この学年が、前述の一九四八年度の分岐を経る学年進行になるからである。このように年度がひとつ進むと学年も進行し、表では右下に移る。しかし、学籍簿の作成過程を表に反映させるため、学年進行とは逆に、第○回卒業生の表記を遡及させた。

また、学籍簿によりながらも、時には他資料も参照し、各学校の卒業生数（退学・転校生を含む）を記した。このうち、新制南山中学校の卒業生は、新制南山高等学校に進学しなかった者の数である（数字は判るものだけを記した）。

ただ、この分岐となる時期についても、判明しなかったことが少なくない。そもそも、旧制の学籍簿と新制の学

表 旧制南山中学校から新制南山高等学校への転換

年度	小学校卒業後の学年齢					
	I	II	III	IV	V	VI
1941	旧制中1 (11回卒)	旧制中2 (10回卒)	旧制中3 (8回卒)	旧制中4 (7回卒)	旧制中5 (6回卒77名)	
1942	旧制中1 (12回卒)	旧制中2 (11回卒)	旧制中3 (10回卒)	旧制中4 (8回卒)	旧制中5 (7回卒74名)	
1943	旧制中1 (13回卒)	旧制中2 (12回卒)	旧制中3 (11回卒)	旧制中4 (10回卒)	旧制中5 (8回卒82名)	
1944	旧制中1 (14回卒)	旧制中2 (13回卒)	旧制中3 (12回卒)	旧制中4 (9回卒82名 (旧制中4卒=11回卒))	旧制中5 (10回卒177名)	
1945	旧制中1 (14期生)	旧制中2 (14回卒)	旧制中3 (13回卒)	旧制中4 (12回卒)	旧制中5 (11回卒30名)	
1946	旧制中1 (15期生)	旧制中2 (14期生)	旧制中3 (14回卒)	旧制中4 (13回卒)	旧制中5 (12回卒127名)	
1947	新制中1 (3回卒)	新制中2 (2回卒)	新制中3 (1回卒80名)	旧制中4 (14回卒)	旧制中5 (13回卒68名)	
1948	新制中1 (4回卒)	新制中2 (3回卒)	新制中3 (2回卒14名)	新制高1 (3回卒)	新制高2 (2回卒)	新制高3 (1回卒67名)
1949	新制中1 (5回卒)	新制中2 (4回卒)	新制中3 (3回卒22名)	新制高1 (4回卒)	旧制中5 (14回卒32名)	
1950	新制中1 (6回卒)	新制中2 (5回卒)	新制中3 (4回卒29名)	新制高1 (5回卒)	新制高2 (3回卒)	新制高3 (2回卒160名)
1951	新制中1 (7回卒)	新制中2 (6回卒)	新制中3 (5回卒36名)	新制高1 (6回卒)	新制高2 (4回卒)	新制高3 (3回卒115名)
1952	新制中1 (8回卒)	新制中2 (7回卒)	新制中3 (6回卒)	新制高1 (7回卒)	新制高2 (5回卒)	新制高3 (4回卒91名)
1953	新制中1 (9回卒)	新制中2 (8回卒)	新制中3 (7回卒)	新制高1 (8回卒)	新制高2 (6回卒)	新制高3 (5回卒135名)
					新制高2 (7回卒)	新制高3 (6回卒126名)

備考：「期生」は旧制南山中学校の「第14期入学生」「第15期入学生」であることを意味し、それぞれ新制南山中学校の第1回卒業生・第2回卒業生となるが、その転換を明確にするために、表のように記した。卒業年次の数字は学籍簿によった卒業生数(退学・転校を含む)であるが、部分的に他の史料も参照した。

籍簿では、記載項目や記入の仕方自体が大きく変化していた。ただ結果として、南山学園の中等教育では表のように旧制から新制への転換が進んだと考えられること、これが本章の主たる結論である。

ここで表から読みとれる旧制から新制への転換と学校間接続について、補足・整理をしておく。以下、羅列的に述べる。

①一九四七年の新制中学校発足時には、新制南山中学校一年生～三年生が同時に開設され、前年度の旧制南山中

学校一年生と二年生がそれぞれ新制の二年生と三年生に進級した。前年度の旧制南山中学校三年生と四年生は、そのまま、旧制の四年生と五年生に進級した。すなわち、一九四七年は新制の上に旧制が載る形となった。

②一九四八年の新制高等学校発足時には、やはり、新制南山高等学校一年生と三年生が同時に開設されたが、一九四七年度の旧制南山中学校四年生は、希望すれば、旧制南山中学校五年生に進級でき、彼らが最後の旧制南山中学校卒業生となった。同様に一九四七年度に旧制南山中学校を卒業する五年生は、そのまま卒業するか、新制南山高等学校三年生に編入することができた。これが一九四八年度の新制南山高等学校の卒業生数である。

③一九四七年の新制南山中学校三年生が新制南山高等学校の第三回卒業生となったが、彼ら全員が新制南山高等学校に進学したわけではなく、卒業後に就職もしくは南山とは異なる高等学校へ進学した生徒がいた。

④一九四四年度のみ、戦時特別措置により旧制南山中学校を四年で卒業した者がいた。ただし、本人の希望によつて、五年生への進級を選択できたので、一九四五年度に五年で卒業した者もいた。卒業年が異なることになるので、彼らは二冊の学籍簿に分けて掲載された。このため、入学年度と卒業年度の数字は一九四五年の卒業生から一致しなくなる。これが旧制南山中学校の学籍簿の特徴である。¹⁷⁾

2 転換の特徴

旧制南山中学校から新制南山高等学校への転換における特徴は、表に即して右に述べた通りである。なかでも最も大きな特徴は、新制の学校が設置される際、基本的に全学年がはじめから開設されながらも、一方では新制にない旧制中学校四年生・五年生も維持しつつ、一九四七年度に旧制中学校に在学した生徒に旧制中学校卒業の途を残したことである。この措置により、旧制卒業生は南山学園に設置された旧制の専門学校である名古屋外国語専門学

校に入学することができ、また、その他の旧制高等教育機関に進学することもできた。

今ひとつ指摘すべきは、旧制で中学校に入学して新制南山中学校で卒業した者のうち、新制南山高等学校へ進学しなかった生徒がいたことである。その理由の分析は簡単ではないが、これは実態として、初期の新制南山高等学校・中学校が、中高一貫教育ではなかったことを意味する。南山学園から見れば、当然進学してくると思っていた生徒が進学してこなかったことになるのかもしれない。このために生じたとみられる新入学生の減少が、表からも確認できる。旧制南山中学校第一四期入学生と第一五期入学生が新制南山高等学校の第一期入学生・第二期入学生となるが、彼らが卒業する一九五〇年度と一九五一年度の卒業生数は、明らかに激減しているのである。

以上のような転換の過程は、南山学園に固有のものというべきであり、私立の旧制中等教育機関から新制中等教育機関（前期・後期）に転換した場合に等しく行なわれるものではない。一例として名古屋市内の同じキリスト教系中等教育機関である金城学院の場合を、『金城学院百年史』から転換の過程を再現し比較してみても、金城学院の場合、一九四八年度から旧制中等教育機関を残していないとされる点¹⁸が大きく異なっている。したがって、戦後教育改革期の転換と学校間接続については、本稿のような個別の検証が必要となるのである。

次に、転換の課程において選択が可能となったとき、多くの生徒はどちらを選んだかをみておきたい。ここまで指摘してきたように、南山学園では新制か旧制かの選択肢が与えられたとき、旧制を選択する生徒が多かった。前述したように、一九四七年度の旧制南山中学校四年生は、一九四八年度に新制南山高等学校二年生か、あるいは旧制南山中学校五年生を選択することができたが、旧制南山中学校五年生を選択する生徒が約三分の二に及んだ。ただし、彼らの場合には一九四九年から新制大学が発足してしまうので、卒業後の進学を考えたとき、この選択肢は不利になる。一九四八年度に十二の公・私立大学が設置されているので、次年度本格的に新制大学制度が発足する

ことは明らかである。しかし、諸事情により、新制高等学校編入を選択できない場合もある。そこで救済措置として想起されるのが、彼らに新制高等学校卒業の資格を与える名古屋外国語専門学校専修科の存在である。

名古屋外国語専門学校専修科は、本来は旧制中等学校卒業生に「速成」を旨として一年間、語学の学修を行なうものであったが、一九四八年度には旧制中等学校卒業生に新制大学入学資格を与えるものとなった。しかし、専修科は一九四八年度を以て終了したとみられるため、一九四八年度旧制南山中学校卒業生は利用できなかった。このため、一九四八年度の旧制南山中学校卒業に該当する生徒の多くは、翌年度、新制南山高等学校に編入し、大量一六〇名の卒業生となった。

いっぽう、一九四八年五月には新制南山高等学校に夜間課程を設置することが認められ、一九四九年度から第一学年の募集が始まった。一九四七年度の新制南山中学校卒業生には間に合わなかったが、一九四八年度からの新制南山中学校卒業生には定時制高等学校という選択肢ができたことになる。あるいは一九四七年度新制南山中学校第一回卒業生に定時制高等学校を準備できなかったことが、定時制高等学校設置の契機となったのかもしれない（なお、定時制高等学校は一九五三年三月を以て廃止となった）。

以上の記述からわかるように、一九四八年度旧制南山中学校卒業生は、高等教育機関へ進学するための資格を南山学園で獲得することが不可能となった。これは、旧制中学校を選択した時点で、新制大学への進学は諦めたか、その意志がなかった者とみなされたことを意味するのである。一九四八年度に限り名古屋外国語専門学校専修科が予定される南山大学の入学資格を与えたのは、まだ南山大学が設置されていない段階での特例であったと言えるかもしれない。手続き的には、一九四八年度の名古屋外国語専門学校専修科は「新制夜間大学」つまり南山大学二部に入學するという限定された進路のために存在したのであった。

旧制南山中学校の生徒は、上級学校への進学が意識された場合、新制学校の卒業資格を求めて新制に編入するか、救済措置に乗るなどの選択肢を選んでいるものと理解された。言い換えれば、進学を念頭に置かなければ旧制南山中学校と新制南山中学校、名古屋外国語専門学校と南山大学とは、同等の資格と意識され、且つ、在学年限が短く済む方が選択されたと理解できる。このような選択が多く行なわれるのは、戦中期と、定時制や二部に生徒・学生が集まるような戦後一時期の社会を背景としているのかもしれない。⁽²⁾

最後に前身校を持つとは表現し難い、南山高等学校・中学校（女子部）について一言しておきたい。女子部の場合は、新制中学校の開設は男子部より一年遅れて一九四八年四月に設置され、新制高等学校は中学校の卒業生が出た一九五一年に設置されている。南山高等学校・中学校では、制度上は高等学校と中学校の二つの学校であり、その中に男子部と女子部があることになっているが、実際には、男子部・女子部がそれぞれひとつの学校のように運営される。これは、カトリック学校においては、新制中等教育は男女別学に行なうという方針に従ったものである。⁽³⁾このように、実態として男女別学の独立した学校として運営されているため、学年の整備が男子部と女子部とで別々に進行しても問題はなかった。

初期の南山学園では、大学と男子部・女子部（つまり高等学校と中学校）が同じ街区に設置されており、学園全体の行事（学園祭や要人の歓迎式など）が合同で行なわれた。つまり、中・高・大の連携が実現していたのであるが、まず女子部が、次に大学が移転すると学園全体で行なう行事は出来なくなった。現在、戦中期の短期間だけ存在した小学校が南山大学附属小学校として復活し、小学校と大学の連携は南山学園の新たな課題になっている。⁽⁴⁾

むすびにかえて

南山学園における新制から旧制への転換の特徴は、旧制／新制の選択が可能となった場合、必ずしも新制を選ぶ学生が主流派ではなかった点にある。これは、在学年限と取得できる資格（上級学校への進学資格を含む）との比較の問題となる。何よりも旧制と新制の最大の差異は、中学校が義務教育であるか否かである。中学生になることが厳しい選抜の結果であれば、より上級の学校では、同世代に占める割合は当然小さくなり、限られた存在であることの貴重さは確実に旧制の方が上であった。高等学校及び高等教育機関への進学率が低い学制改革初期では、このような理由で旧制が主流となる可能性があり、南山はそれに該当した。したがって、後期中等教育機関及び高等教育機関への進学率が高まれば、このような可能性は生じなくなるが、そうなった段階では既に旧制から新制への転換は過去の話になっている。

一般論としてはこのように言えるのであろうが、実相は個別的である。本稿のような事例研究を積み重ねること、当事者の視点に立って旧制から新制への転換を具体的に論じられるのではないだろうか。少なくとも本稿では、新制が当事者の多くに積極的に受け入れられたのではない実態を提示できたと考えられる。

本稿の成果のひとつは、学籍簿（指導要録）という学校に備えられる文書が、どのようにまとめられ、管理・保存されるかのアーカイブズ学的理解によって、文書の構造が理解できたことである。ささやかな事例ではあるが、文書のライフサイクルを理解することが、文書を理解する鍵となったことを示し得たと考える。本稿は教育史の一過程を扱った論稿であるが、この点においてアーカイブズ学の一事例となり得るのであり、史料のアーカイブズ学的検討の有効性を示したものと理解されよう。

- (1) 本稿が対象とする旧制南山中学校は五年制であり、男子のみが入学する。そのため、本稿の主たる対象は男子生徒である。
- (2) 文部省編、第二編第一章第三節「新制高等学校の発足」、帝國地方行政学会刊、一九七二年。
- (3) 法人の名称としての「南山学園」は一九四六年七月から使用される。本稿では、学校の経営体あるいは総合学園の呼称として「南山学園」と表記する。
- (4) 学校間接続の問題は、『教育学研究』第七七巻第二号特集「学校間接続をめぐる問題と今後の論点(二〇一〇年六月、日本教育学会)など、「現在」の課題に即して論じられることが多い。戦後教育改革の実際については、転換について山内太郎編『戦後日本の教育改革5 学校制度』(一九七二年、東京大学出版会)などがあり、各段階の学校の設置、課程、教科などに研究蓄積があり、接続については山田朋子「戦後教育改革における新制高等学校の成立過程―大阪府の入学者選抜状況を中心に―」(『奈良女子大学教育学科年報』第一号、一九九四年一月、奈良女子大学)などがあり、とくに受験という視点からの研究が同時代的関心もあって進められているが、本稿のような関心は少ないようである。
- (5) 本稿はここで扱った学籍簿について南山高等学校・中学校(男子部)から打診があった際、中尾と永井が南山アーカイブズ委員として当該資料について行なった調査に基づいて執筆されている。
- (6) 永井英治「戦後設置の専門学校の歴史的意義―外国語専門学校「遺産―」『アカデミア』人文・社会科学編第八二号、二〇〇六年一月、南山大学。以下、名古屋外国語専門学校史料については、南山学園史料集 名古屋外国語専門学校史料集』(二〇〇五年四月、南山学園)に拠った。
- (7) 海後宗臣・寺崎昌男『戦後日本の教育改革9 大学教育』第二章「四年制大学」、一九六九年、東京大学出版会。
- (8) 南山アーカイブズで閲覧可能な史料には、この点に言及したものはない。仮に議論がなされていれば、南山学園史を独力で執筆した松風誠人が必ずメモ(南山アーカイブズでは松風メモと呼ばれている)を残したはずで、南山学園史のポイントを確実に押さえている「松風メモ」に関係する記述が見られないのは、やはり一九四九年設置が規定の路線であったと考えられるのである。
- (9) 以下、南山大学設置認可関係の記述は、『南山学園史料集13 南山大学設置認可申請書』(二〇一八年三月、南山アーカイブズ)による。
- (10) 『HOMINIS DIGINITATI』南山学園創立75周年記念誌』第一章第四節第四項「四日市南山と長崎南山」、南山学園、

- 二〇〇七年。
- (11) 第一部第二章第三節「創設時の南山大学」、南山大学、二〇〇一年。
- (12) 『南山学園史料集13 南山大学設置認可申請書』（前掲）「解説」。
- (13) 鳥居朋子「戦後教育改革期における上原専祿の大学教育論―実業教育への内省に基づく一般教育論の展開―」『名古屋高等教育研究』第四号、二〇〇四年一月、名古屋大学高等教育研究センター。
- (14) 林雅代「南山大学インターナショナル・ディヴィジョンの開設と終焉―日米高等教育関係史についての一試論―」『アルケイアー記録・情報・歴史』第一号、二〇〇七年三月、二〇〇七年三月、南山大学史料室。
- (15) この点は南山大学設置認可書（『南山学園史料集13 南山大学設置認可申請書』（前掲））に設置条件として記されていた。南山学園は文部省の指示を先取りして設備を配置していたことになり、ここに南山学園の志向が読み取れよう。
- (16) 音楽の授業では、楽器の演奏という実技の科目まで用意されていた。
- (17) あらかじめ第〇回卒業生となることがわかっていれば、入学時からそれを「第〇回生」のように転用することも可能である。しかし、本文で述べたように、旧制南山中学校では、入学時は一緒に卒業年度が異なることがあるため、そのような方法は適切とは言い難くなる。
- (18) 第三章第三節「学制の改革と発展」一九九六年、金城学院。なお、「金城学院」とは、一九四七年に改称された名称で、それ以前は金城学園であったが、本稿での比較の対象はおもに一九四七年度以降なので、金城学院の名前を用いている。
- (19) 一九四七年四月「南山外国語専門学校規程」（南山学園史料集 名古屋外国語専門学校史料集）（前掲）第九六号。
- (20) 「専修科日誌」（『南山学園史料集 名古屋外国語専門学校史料集』（前掲）第一〇〇号）が一九四九年四月三日で終わっており、一九四九年度入学生の募集に関する記事がないことから、このように判断した。
- (21) ささまざまな理由により、昼間課程の学校に通学できない学生・生徒がいる。そのため、ここでは経済的理由のみを挙げることをしなかった。
- (22) 『HOMINIS DIGNITATI 南山学園創立75周年記念誌』（前掲）第一章第四節第二項「中等教育の新展開」。
- (23) 中尾と永井は、二〇一六年度・二〇一七年度に高大連携事業の一環として、大学に所属する永井が男子部に出かけて、男子部に所属していた中尾の協力を得て「歴史の中の南山」と題する授業を行なった。中尾の発案によるこの授業は二〇一八年度以降実施できていないが、ささやかな連携事業であるとともに高校生に対する自校史教育を行なう試みは、検討に値すると考えている。

The Converting and Articulation between Schools in Postwar Education Reform Period: A Case Study of Nanzan School Corporation

NAKAO Hiroyasu and NAGAI Eiji

Abstract

In this paper, we restore the converting from old system school to new system school and articulation between schools of Nanzan School Corporation in postwar education reform period. Our analysis makes clear as follows:

1. The graduates of Nagoya College of Foreign Languages transferred Nanzan University school year second. It meant that entering into liberal art course in Nanzan University was more important than duplicating school years. The other hand, the graduation of Nagoya College of Foreign Languages was considered as equal as the graduation of Nanzan University at the eye point of license.
2. According to our restoration of the converting and articulation of Nanzan School Corporation, most students made their choice old system school in the case of no entering into higher school. The reasons of their choice why that they considered as equal old system high school and new system junior high school in such a case.
3. Our analysis of the school register needs the eye point of archival science. The lifecycle of the school register in Nanzan School Corporation is one of the most important way to understand our subject.